

NIE
全国大会
名古屋大会
8月3、4日

実践発表・小学校

第二十二回NIE全国大会名古屋大会が八月三、四日、名古屋国際会議場(名古屋市熱田区)で開かれます。メインの一つが、小中高校の実践発表と公開授業です。登壇する十九人の先生は日々どう取り組んでいるのでしょうか。順次紹介します。

情報活用の実践力を高めるNIE実践

二〇二二年度から教科書のカリキュラムに沿いながら新聞を使っています。過去には国語と社会でNIEに取り組みました。意識するのは読み比べです。例えば、一三年に冒険家の三浦雄一



最初は「新聞は難しい」と感じる子もいますが、個人としては「子どもは新聞を読むのが好きだな」という印象です。写真に興味を持つ子は多いです。見出しや写真に着目しながら新聞に慣れ親しめば、徐々に抵抗感は薄れますよ。(聞き手・那須政治)

愛知県碧南市西端小 三牧 道代教諭 (49)



本校では新聞を活用した教育活動を二〇一四年度から全教科、全学年で進めています。新聞となじみにくい教科もありますが、教諭らが知恵を出し合いました。例えば図工。六年生は

いつでもだれでもどこでもNIE

「頭の中は…」と題し、印象に残った記事の切り抜きを自画像の周りに貼り付けるコラーージュ作品に挑戦します。記事がまだ十分に読めない一年生も、震災報道の新聞を使ってスリッパなどの防災グッズを作ります。

三年生になると朝の読書の時間に週一回、新聞を読みます。授業で新聞の切り抜き作品をつくり、発表し合うのも三年生以上が対象です。積み重ねることで長い文章も粘り強く読んだり、要点をまとめたたりする能力が身に付いています。(聞き手・片山健生)

自己肯定感を培う特別支援学級でのNIE



愛知県豊橋市植田小 守田みずも教諭 (44)

知的な機能や情緒などに障害のある子どもは、豊かな感性があるのに表現することが苦手な子が多いです。子どもたちが潜在的に持つ「表現する力」を伸ばそうと、壁新聞作りを始めました。学校には多くの地域の人が訪れます。太鼓の演奏やうどん作りなど、さまざまなことを子どもたちに教えてくれるので、そこでの学びを壁新聞にして張り出します。いきなり長文を書くのは難しいので、その日の描写や感想を一人一人が短文で寄せ合い、全員で話し合っって記事を作っています。

学習を通して「誰に何を伝えたいか」を考えられるようになりました。普通学級の児童や地域の人からも好評で、自己肯定感が高まっているように思います。(聞き手・相沢紀衣)

名古屋市大和小 玉井 尚子教諭 (40)

二年生に、自分の思いを言葉で伝える力を付けてほしいと考えました。児童はまずアカウミガメ産卵の記事を読み、最初の一文に「いつ、どこで、誰が、何をした」を書く文章構成を学びました。その時に使ったのが独自教材「はなしのおはな」。花びらに「いつ」「どこで」などが書かれ、児童が記事を読んだり、書いたりする際に確認できるものです。続けてアシカの赤ちゃん誕生の記事から、五感を働かせて様子をいきいきと伝える表現方法も学びました。最後に「おはな」を使い



ながら水泳学習を題材に作文を書きました。最初に来事を書きまじめ、目や耳で感じたことも表現し、様子がよみがえってくるような文章を書きました。(聞き手・世古絃子)

取り組みを教えてください。みなさんは、どうやって新聞を活用していますか？ 8月のNIE全国大会に向けて、学校、地域、家庭などでの取り組みを募ります。わくわくするような楽しい実践をお待ちしています。ファクス0552(221)0591、メール junior@chunichi-hi.co.jpまで送ってください。

狙うぞ 特ダネ!? たなかひさし



サッカーの日本代表戦の場合、写真記者は各コーナーと観客席上段の最多五カ所に陣取っています。

一瞬にかける写真記者

狙うのは、試合を決めるシーンが放たれた決定的瞬間です。画面にボールが写っていないと迫力が伝わりませ

ない。一試合で使える写真は二、三コマというところも少なくありません。プレーは九十分間超ですが、コマ何秒の一瞬にかけているといえるでしょう。

新聞とわたし

五年生の頃から自宅で中日新聞を読んでいました。おじいちゃんに教わって将棋をしているので、ラジオ欄の下にある将棋の棋譜をチェックします。将棋といえば、同じ瀬戸市出身のプロ棋士、藤井聡太四段の記事も読んでいます。地元で

将棋の棋譜をチェック

同じ将棋教室に通っていた藤井君がこんなに連勝記録を伸ばしているなんて、本当にすごい。相撲と野球も好きなので、運動面もよく読みます。最近が高安関の大関昇進や、中日の荒木雅博選手の2000安打達成など、大ニュースばかりが目が離せません。新聞は自分のペースで読めるし、テレビにはない地元の話題も載っているのが面白いですね。(愛知県瀬戸市原山小六年)



中島大登君